

「つながりと重なり」を捉える「相互循環型」評価枠組み

ー包括的支援体制構築に向けた9象限評価構造の展開可能性ー

○ 同朋大学 加藤 昭宏 (010274)

「のりしろ」機能・個別支援と地域支援の「統合」機能・「関わりしろ」

1. 研究目的

包括的支援体制の構築に向けた評価の実施方法やあり方は未整備である。このため実践現場においては、進むべき方向性が定まらず、またどう評価してよいのかわからず、実施状況にもばらつきがみられることがある。重層的支援体制整備事業（以下、重層事業）においても、単に各事業を実施しアウトプット評価をするだけでなく、既存体制の見直しや体制構築に向けた議論、合意形成のプロセス、またアウトカム評価が重要であるといえる。

以上のことから本研究では、重層事業を活用した CSW 実践の蓄積から、「つながり」や「重なり」の質を可視化し、重層事業の実践的な評価枠組みを提示することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究は、筆者の重層事業に関する論考（加藤，2025a；2025b）を対象に比較分析を行うものである。分析にあたっては、それぞれの論考の支援対象、スキーム、実践の介入レベル（ミクロ・メゾ・マクロ）やその波及効果について整理し、共通点と相違点を明確化した。またドナベディアンの評価枠組み（Donabedian, 1980=2007）を用いて、構造・過程・成果の3層から、それぞれの実践における評価指標の展開可能性を検討した。

3. 倫理的配慮

本研究は既存の公開論文をもとにした分析である。日本社会福祉学会研究倫理規程等に則り研究を実施し、調査対象者の個人情報や研究倫理に直接関わる事項は含まれていない。加えて、本報告に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等はありません。

4. 研究結果

分析の結果、3つの論考はいずれも制度や支援の「狭間」に注目し、新たなつながりや支援の重なりを重視していた。具体的にみていくと、①CSWの「のりしろ」機能として、中学校卒業などライフステージの変化を見据え、学校・専門職・地域住民の支援の狭間を埋め、情緒的共感に基づく協働によって重層的伴走型支援が展開可能となることを示した。②参加支援を個別支援と地域支援の「統合」機能として捉え、多様な場や主体で重層的に統合を促進することで、個別支援が深化し、地域福祉の基盤強化を図れることを示した（2025a）。③地域づくりでは、地域住民や福祉事業所と対話し、複数の役割や目的を重ね合わせ、活動を通し「関わりしろ」（動的な関わりの「のりしろ」）を増やしていくことで地域住民の主体性が発揮されるなど、複数の波及効果につながることを示した（2025b）。

このように、3実践はそれぞれ①個別支援・ミクロ中心／②個別支援と地域支援の往還・ミクロ～メゾ・マクロ／③地域づくり・メゾ～マクロにおけるつながりや重なりを新たに作り出す実践だといえる。この3実践を、ドナベディアンモデルを用いて3層で構造化し

整理した（表1）。同モデルの採用理由は、現場実践との親和性が高く、制度横断的・多層的に展開する重層事業の評価、および思考補助枠組みに応用できるとの判断からである。

表1 重層事業評価の9象限モデル

	構造（Structure）	過程（Process）	成果（Outcome）
のりしろ 実践	個別支援における学校・ 専門職・地域活動等の重なり	情緒的共感に基づく 多機関協働	重層的な 伴走型支援体制の構築
統合実践	個別支援実践と地域支援 実践の重なり	重層的な統合による 参加支援の推進	個別支援の深化と 地域福祉の基盤強化
関わりしろ 実践	地域福祉活動に向けた 対話と役割や目的の重なり	活動、準備に向けた 地域づくりの取組み	主体性の発揮や 多機関協働等への還元

5. 考察

本研究では、重層事業に関する3つの論考を9象限のマトリクスに整理した。9象限を具体的に「指標化」することにより、例えば構造について「どのような協働体制が新たに構築されたか」「統合の場がいかに形成されたか」など、関係構造の変容をアウトカム評価できるようになる。またここでは、成果に関する主要業績評価指標（KPI: Key Performance Indicator）を設定し、そこに至る過程をアウトプットとして評価に組み込むことで、従来評価が難しかった地域づくりの包括化についても評価が可能となり得る点を強調したい。

加えて、3つの実践は独立した枠組みではなく、「相互循環型」の構造を形成している。具体的には、②「統合」実践が①「のりしろ」実践や③「関わりしろ」実践を促進し、③「関わりしろ」実践もまた①多機関協働や個別支援実践へ還元され得る。この「相互循環」という連動構造を立体的に捉え、そのあり方自体をも評価対象に加えることで、重層事業全体の動態を踏まえた包括的な評価枠組みが構築できるといえる。また本評価枠組みは、包括的支援体制構築に向けた議論の基礎理論ともなり得ると考える。本枠組みを活用し、現場実践者が「具体的かつ測定可能な指標に落とし込むプロセス」そのものが意味を持ち、より高次の視点を持って体制構築や業務遂行に臨めるようになる等、職員のマネジメント能力向上等にも資する可能性があると考え。今後、行政・社協職員と共に実証的検証を重ね、包括的支援体制構築に向けた政策実装と理論構築の循環を目指したい。

加藤昭宏（2025a）『社会的孤立へのコミュニティソーシャルワーク実践 地域福祉推進の羅針盤』ミネルヴァ書房。

加藤昭宏（2025b）『『地域づくり』推進の方法論—まちあるき活動を通した『関わりしろ』実践から』『日本の地域福祉』38：1-16。

Donabedian Avedis (1980) “Explorations in Quality Assessment and Monitoring” Volume1 The Definition of Quality and Approaches to Its Assessment. （＝（2007）東尚弘訳『医療の質の定義と評価方法』健康医療評価研究機構）。